発行所（郵便番号100）
東京都千代田区丸の内2−4−1
丸ノ内ビルヂング781号室
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel（212）4007・1447
編集責任者　中嶋　博
印刷所　関東図書株式会社
定価200円（年間購読料参千円）
1985年12月25日発行
第17巻　第12号
（毎月1回25日発行）
昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol. 17 No. 12

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
Marunouchi-Bldg., No. 781. Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan

学術交流とスウェーデン王国の持つ意味と位置

Academic Exchange with Sweden

日本学術会議　会員
東洋大学教授　商学博士　島　袋　嘉　昌
Prof. Yoshiaki Shimabukuro

スウェーデン王国派遣代表団（8名）は、11月中旬主としてストックホルムとウプサラに滞在し、関係機関と意見の交換・討議を行なった。いろいろな問題はあるが、ここでは同国の平和構想と科学技術に限定しておきたい。

(1)　スウェーデンの防衛構想と平和問題

私が一番興味のあることは何といっても171年間国民の血を一滴も流さなかったという事実である。これについては、いろいろなコメントもあるがその事実は厳然たる事実で実に重い。この国のスケールと実力でどうして2世紀近い間、平和を維持することができたか不思議である。そこにはかなりしっかりした哲学を持った政治家と科学者がいたのではないだろうか、（武装中立）。それについてある大学教授（ストックホルム大学）に質問をしてみた。

多分それらに強い影響力を与えた政治家は第一次大戦後ではヤルマー・ブランテンク（1920年代）であろうと答えられた。これらについての正確な資料を入手することはできなかった。われわれは、これらの歴史的事実をもっと詳細に分析・吟味する必要がある。

新しい21世紀の人間的歴史創造のために政治家・経営者・科学者ももっと本格的な科学的研究の総合化を推進するべきであろう。

(2)　スウェーデンの科学技術と教育問題

東洋大学は昭和62年に開校100周年記念事業を行う予定である。国内では100周年というととても大げさに誇り高く身構えるようなところがある。それ自体非難すべきことではない。

ところで、スウェーデンのウプサラ大学は1477年に創立された。今年で508年になる。さらに、1662年当時の人体解剖台のある実験室を見せられた時はさすがに歴史的、科学的実態に圧倒された。

われわれは、大学において研究と教育を無意識（？）のうちに行っている傾向がある。その点まさに反省しなければならない。

われわれは830万人のスウェーデン人が科学国家と教育によって平和を維持している現実を直視したい。ノーベル賞も頭脳的防衛の一つの手段となっている。ノーベル財団のラメル会長の柔和な風貌の中に科学と平和が統合されているような感じがした。スウェーデンにも問題点はあるが大筋として人間的政治・経済・科学・教育を展開している点はさすがである。今後は日瑞の学術交流を通じ科学哲学の貧困なわが国に喝（カツ）を入れていくように継続的な共同研究を期待したい。そのための総合科学研究機関が必要である。関係当局のご協力を切望する。

目　次

学術交流とスウェーデン王国の持つ意味と位置……島袋　嘉昌…1
冬の暮し……藤井ユリ子…2
ウップサラ大学ダールレーフ教授と日本の教育改革……3
日本型福祉の問題点（視察団報告）……飯田　良明…3
（Göteborg 通信）矢野さんの死…三瓶　恵子…4
昭和60年度研究月報目次一覧……6

「冬　の　暮　し」

"Life in Wintertime"

スウェーデン大使館広報部　藤　井　ユリ子
Mrs. Yuriko Fujii

スウェーデンの冬は、暗く長いというのは本当です。しかし、私にはその限りなくゆっくりとした時間の流れが、不思議に充実した、手応えのあるものとして思い出されます。それは、夢のように速く過ぎる夏といかにも対象的で、京都に育ち、程の良い頃に季節が移ろうのに慣れた、典型的日本人であった私に、この圧倒的な威力を持つ自然との出会いは、強烈、かつ新鮮なインパクトを与えたようです。まるで、その厳しさが私の中の根源的な生命力を呼び覚ましていくかのように、日毎に寒さに適応し、生活を楽しみ出している自分に驚いたものです。それはまた、その自然が創ったとしか思えぬ、冷静で、合理的な、森の中の思索の人、スウェーデン人への理解を深めた2年間でもありました。

そもそも縁あって姉がスウェーデン人に嫁いだのが、私がストックホルム大学で勉強することになったきっかけでした。北国の事とて覚悟はしていましたが、黄葉の美しい、短い秋の後、一変して厳しい寒さとなりました。10月になると、4時には早や真っ暗、先が思いやられました。そこで義兄に、スウェーデンでは冬とは何時を指すのかと尋ねますと、澄ました顔で12月から3月までだよと答えます。じゃあ今のこの寒さは何なのだ、と私は内心ブツブツ。後で聞いたところではスウェーデンでは氷点下を切らないと冬とは認めないそうです。しかし、さすがの彼等も憂鬱な表情を隠しきれなくなる頃、11月も終り、やっとアドヴェント（降臨祭）が始まりました。

家々の窓辺を飾る4本のローソクが並んだアドヴェント・リュース（クリスマスまでの4週間の間、日躍毎に1本づつ灯もされる）の最初の1本に灯がつくと同時に、1年で1番暗い季節は突然、光溢れる祭典にとその姿を変えました。人々の顔も輝きを取り戻し、ルシア祭とクリスマスの準備を始めます。街のショーウィンドーにはクリスマスの飾り付けが登場し、既に真っ暗に暮れた家路をたどれば、白い雪道の中に道標べのように、ぽつんぽつんと家々の窓にアドヴェント・シェーナと呼ばれる星の形をしたイルミネーションが浮かび上り、枯れた木立に咲いた樹氷のような雪の華と美しいコントラストを見せます。

姉の2人の娘達の楽しみは、日本で正月を指折り数えて待つように、アドヴェントを通してテレビで放映される子供用特別番組に合せてクリスマスカレンダーをめくることです。全部の隠し窓を開ければ、クリスマスには1つの大きな絵がが完成します。12月13日には、女の子なら1度はルシア姫になりたいと憧れるルシア祭があります。姉の娘達が何故自分の髪は黒いのかとダダをこねるのもこの時です。平等の国スウェーデンでも、やはりルシアは金髪にローソクの冠を頂き、白いドレスに赤い帯と決っているようです。やがてパパが大きなモミの木を買って来ると、いよいよ子供達がツリーを飾りつけ、折紙も混じったユニークな物に仕上がります。クライマックスはイヴのプレゼント交換で、おどけた詩を添えるのが習慣です。クリスマス当日は暗いうちから起き出して、姉夫婦が聖歌隊に参加している教会の早朝礼拝に行きます。夜はおめかしした娘達を連れて、街に住む叔父さん夫婦を訪ねます。彼等には子供がなく、美術館のように古風な家具に囲まれて暮していますが、この日はクリスマス料理を山のように用意して、姉一家が来るのを待っています。宴がたけなわになると、映画の「ファニーとアレキサンデル」の1シーンのように皆で手を繋いで、家中を部屋から部屋へ歌いながら踊り回ります。そんな時、童心に返って楽しんでいるのは大人達の方です。クリスマスの後は、大晦日に花火を見ながら乾杯をして、冬の主な行事は終りです。3月どころか、5月始めにやっと来る春の訪れまで、日毎、日が長くなるのを心の支えにスウェーデンの人々はまたその堅実な暮しを続けるのです。

ウップサラ大学ダールレーフ教授と日本の教育改革

Prof. Urban Dahllöf in Japan

当研究所の招きを受け、スウェーデン大使館の後援により来日の実現したウップサラ大学のウルバン・ダールレーフ教授（Prof. Urban Dahllöf）は、文字通り今日のスウェーデンの教育学界を代表する方であるが、去る11月２日～14日の間、多忙な行事日程を精力的にこなされ帰国されたが、我が国の教育界に影響を与えるところ少なからぬものがあった。

とくに11月６日午後、東京霞が関ビルの東海大学校友会館を会場として開催された「教育改革セミナー」（公開）は、まことに有意義な会合であった。討論者として自民党から森喜朗代議士（前文相）、社会党から河上民雄代議士（党教育局長）の両氏を迎え、司会者には木田宏博士（臨教審専門委員）が当たられた。

教授は、「スウェーデンにおける中等教育改革」と題して、高校審議会会長としての経験から、①改革すべきかすべからざるか、その点が重要である。②改革には国民的合意が必要である。③機会の拡大と質の保持の双方を忘れてはならない。④総合制の下における多様化が大切。⑤リカレント教育の点から高校はとらえられるべきもので、義務制には反対、など12の視点を明らかにされ、それをめぐって活溌な討論が展開されたが、教授の視点はいずれも、今後のわが国の教育改革論議に新たな視座を提供されたものとして、参加者一同に深い感銘を与えたことであった。

滞日中教授は、その他の各種の文化・教育・研究機関を訪問し、講演もされたが、いずこでも心からの歓迎を受けられた。それはクールなアカデミック・マインドの持ち主に加えるに、温かい人柄のしからしめたところであろう。

その一、二について述べると、国立教育研究所での「教育研究と改革―私の経験を通して」と題する講話では、研究と改革をどう関連させるか、研究の自由の保障が大切であることなどについて話され、鈴木勲所長より学術功労賞の金メダルを贈られた。また、早稲田大学では西原春夫総長から金のタイ止を受領された。つづいて京都大学では沢田敏男総長から記念のメダルを贈られたが、同学では、全国から集った高等教育研究者を対象とした「スウェーデンの高等教育改革」と題した講話で、入学者の多様化とこれに伴う大学の構造変化、とくに「25：４」ルールと呼ばれる社会人のための進学規則の導入などについて話され、参加者に示唆するところ多大であった。

なお、滞在期間中に収録したＮＨＫラジオ番組「世界の教育改革」第１回〝スウェーデン〟は、明年１月12日に放送される予定であるが、これはダールレーフ教授の話を中心としたもので、国連大学特別顧問永井道雄博士および当研究所中嶋博常務理事が討論に参加しているものであることを付記しておきたい。

日本型福祉の問題点

―高齢社会調査視察団に参加して―

A Problem of the Welfare for the Aged in Japan

北海道東海大学教授　飯　田　良　明
Prof. Yoshiaki Iida

高齢化社会への途上にあるわが国において、近年、日本型福祉を再評価する声がかまびすしい。それには「子や孫に囲まれた豊かな老後」のイメージが強い。しかし、家族によるケアーへの過剰な期待は経済的にも精神的にも悲劇をもたらすケースさえ、今日ではめずらしくない。同時に日本型福祉の再評価は臨調路線の福祉予算削減であることも見落してはなるまい。

本月報 Vol. 17 No. 10 に報告されている三浦文夫教授を団長とする高齢社会調査視察団に参加させていただき、ヨーロッパ各国の老人福祉政策や老人ホーム等の実態を見聞しているうちに、わが国で日本型福祉が喧伝される理由の一端がわかりかけてきた。訪問した国の多くで「施設中心」

から「在宅中心」へ老人福祉政策が転換され、具体的に実行に移されているのを見ることができたからである。

経済面ではヨーロッパを追いこし、もはや学ぶべきものはないかの如き驕りの風潮が強くなっている最近のわが国ではあるが、福祉に関してはヨーロッパが先進国であると感じている国民が多いから、ヨーロッパでさえ在宅中心すなわち日本型福祉が見直されているという短絡的論調は説得力をもちかねない。老人福祉においてもわが国はヨーロッパから学ぶべきものはないといった誤まった世論が形成されはしまいかと心配になる。

在宅中心の福祉へ政策が転換されたとはいえ、ヨーロッパのそれは日本型福祉と似而非なるものであることを知っておかねばならないであろう。たとえば、スウェーデンでは年金受給者の48%近くが「一人暮し」である。これは65歳以上の老人の約46%が三世代家族の中で生活しているわが国とは明らかに異質である。したがって在宅老人たちが従前の生活スタイルを変更しなくてもすむような種々の care aid system がゆきとどいている。home service center や day care center はその好例であろう。そして何よりも老人たちの自由選択の幅が大きく、個々のニーズに応えうる福祉のシステム化をスウェーデンでは目ざしているようである。経済が停滞し、国家財政がきびしい状況にあるにもかかわらずである。

老人福祉におけるヨーロッパの「社会ケアー依存型」と日本の「家族ケアー依存型」のどちらが老人自身にとって本当の幸福なのであろうか。旧くて新しい問題を改めて考えさせられた視察旅行であった。

＜Göteborg 通信＞

矢野さんの死

三瓶恵子
Ms. Keiko kjellsson-Sampei

イヨーテボリィを根拠地にしてスウェーデン中を文字通り北へ南へ飛びまわっていた矢野実恵子さんが9月13日に脳溢血（くも膜下出血）で亡くなりました。39歳の若さでした。矢野さんはスウェーデンの織物を勉強した後、日本での経験をいかして、スウェーデン人の編物教師を対象に日本の編物のテクニックを教えはじめ、編物材料の会社も設立し、実業家としても成功しはじめた矢先の不幸でした。

9月10日の夜デザイナーの集まりの会議中に最初の発作が起こり病院に運ばれ、翌日様態が安定したところで検査、手術をするはずだったのが、夜中に更に2回発作が起こって、11日の朝にはもう血圧が下がって手術は不可能の状態になってしまっていました。11日の午前中に〝脳死〟の判定がでて、その時点で病院につめていた彼女のパートナー（sammanboende）と近い友人達（私もその一人）に担当医師が診断を説明し、「社会局の規程によって2時間後にもう1度検査をするがもう回復の見込みはまったくないので人工呼吸機による治療をうちきることになるだろう」という〝宣告〟を下しました。そして2時間後の検査でも診断は変わらず、その時点で〝終わり〟が来るはずだったのですが、日本から家族の人達がこちらにむかっているということで人工呼吸機をはずさずに彼らの到着を待つ長い2日間がはじまったのです。装置をつけている間も、血圧、体温、脈搏が下がり続け、最初は2日間はもたないのではないかという予想だったのですが、どうにか家族の人達の到着はまにあいました。

はたしてそれがよかったのかどうか、家族の方達にとって最良の処置だったのかどうか、一週間たった今でもふっと考えこまされてしまいます。なぜなら、それからすぐ装置をはずさねばならなかったからです。

脳死を〝死〟と認めるかどうかの議論は以前から新聞等でもよくたたかわされていましたが、現実に自分のまわりにこんなに突然にこの問題をつきつけられるとは思ってもいませんでした。「スウェーデンでは脳死を死の基準としている」という表現は半分正しく半分正しくないといえます。先の医師によれば〝社会局の規程〟には実際にど

うしろ、ということが書いてあるのではなく、「回復の見込みがないと判定された場合には治療をうちきることができる」と規程されているにすぎないからです。ただ多くの場合は経験上脳死の状態の身体を機械で動かしていても大体一週間以内で身体も死んでしまうので脳死の判定の段階で処置をうちきることが普通である、とその担当医は説明しました。矢野さんが日本人であることから、日本人の心情、考え方を尊重して「もしどうしても続けるというなら機械を動かし続けてもよい」ということになりましたが、結局は、彼女の家族の人達から決定を一任された彼女のパートナーの意見で人工呼吸機をはずすことになり、装置をはずした約10分後に、彼女はとうとう最終的に亡くなりました。友人として、また通訳としてずっと傍についていた私としては、〝現場の証人〟としてその経過を書き残す義務があるような気がして書いています。最愛の人が脳死と宣告され人工呼吸機をつけた状態にあり、口腔内の細菌感染がはじまり、またこめかみに黒い斑が出はじめていたら、人はいったいどうするでしょう？「このままきれいなままで…」と考えたり「どうなってもとにかくどこかが生の徴候を示している限りは…」と考えて容易に決論を下すことはできないでしょう。

とにかく彼女は私達の目の前で亡くなりました。それからのこと、日本式、スウェーデン式お通夜のちがい、お葬式のこと等についてはまた別の機会に書きたいと思います。

矢野さんはいつもほがらかに笑っている人でした。おすしとワインと自分の仕事が大好きで、自分はスウェーデンと日本との間の架け橋になるのだと常日頃言っていた人でした。今その遺骨は二つに分けられ、彼女は文字通りスウェーデンと日本の両方に骨を埋めることになりました。

合掌。

≪ＳＩＰニュース≫

１６８５／８６年度国会の首相演説

10月１日の1985／86年度国会の開会に際し、スウェーデンのウーロフ・パルメ首相（Prime Minister Olof Palme）が行なった社民党政府の政策に関する演説要旨、次の通り。

「政府の経済政策『第三の方法』“the third way”により雇用水準が改善された社会福祉が維持されたのと同時に経済赤字が縮少したため、失業とインフレが減少した。また、産業投資が大幅に増大したことで、維続的な産業の成長とよりよい環境のための基礎が形成された。

スウェーデンは、この年末に、過去10数年における最低のインフレ率を記録することが見込まれているものの、物価は、さらに、下がり続けねばならない。産業の競争力を維持するつもりなら企業のコスト増加を抑えることが肝要であると共に将来、スウェーデンのコスト及び物価が、その対外貿易にとって最重要な国々のコストや物価上昇を上回る速度で上昇するようなことがあってはならない。よって来年度の団体賃金交渉もこの知識を踏まえて調停してゆくべきである。またインフレ抑制には、継続的で厳密な支出監査を含むきびしい財政政策が必要である。

依然として経済政策の最重要の作業である完全雇用については、政府はひき続き若年失業者並びに長期失業者の雇用に特に留意していく予定である。また、国会が設定した地域政策のための精力的なプログラムの推進には技術の拡充、企業の発展、決定・資源の地方分散の増加が重要な要素となろう。

環境保護問題に関しては、空気汚染及び酸性化に対する措置に高度の優先権を与えるべきである。また、無鉛ガソリンへの転換や触媒変換装着を促進する法規や経済的締めつけのための法案が、秋期国会に提出される。なお農業における有害な化学薬品の使用は、今後５カ年以内に半減されるべきであり、政府は新製品への石綿利用に反対する新法規の施行を予定している。

さて、スウェーデン政府は、その中立政策を今後とも、活力と明瞭性と一貫性を持って推進してゆく所存であり、五大陸の他の国々と一緒に軍縮のイニシアチーブ―中でも核兵器凍結を支持する―を取ってゆくとともに、北欧地域の非核武装地帯のための作業続行及び中央ヨーロッパの非核（戦場核兵器）回廊地帯構想心の支持強化に向けて努力してゆくつもりである。また、ＣＳＣＥの経過

や欧州の信頼醸成装置と軍縮に関するストックホルム会議については、来年度中に軍縮をも含むように同会議の委任権の範囲を拡大する決議が採択されることを期待している。

なお、スウェーデン政府は大規模な国際開発援助政策をひき続き推進してゆく予定で、この種の目的のためにGDP（国内総生産）の1％を割当ることを決議した。

昭和60年度研究月報目次一覧

No. 1　新年に当って……西村　光夫
年頭に当って……松前　重義
New Year's Message for the JISSS-Bulletin……ロバック報道官
New Year's Message……ガデリウス・タロー氏
国際セミナー（婦人の社会参加と生涯教育）に出席して……藤田　千枝
研究所の活動メモ（59年）
No. 2　米国における北欧への関心と研究の高まり……中嶋　博
医療と患者の権利―ウルフ・フレベリイ氏の講演「スウェーデンの医療と法律について」から……潮見憲三郎
第四回スウェーデン Parklek 会議に参加して(1)……福本　歌子
（研究会報告）教育・婦人問題研究会（三瓶恵子）
No. 3　スウェーデンを知らない日本人……土屋　清
1985／86年度予算案について……松下　正三
第四回スウェーデン Parklek 会議に参加して(2)……福本　歌子
No. 4　科学万博とグスタフ国王の来臨……西村　光夫
「スウェーデンにおける医療保障制度の将来ビジョンに関する調査」調査報告書(1)
総括報告……中嶋　博
予防分野におけるプライマリーケアの役割り……髙橋　文
幼児保育を通したスウェーデンとの交流……荒井　冽
（Göteborg 通信）寒い冬、両親保険期間の変更等について……三瓶　恵子
No. 5　スウェーデンの自然と国柄……三宅喜二郎
「スウェーデンにおける医療保障制度の将来ビジョンに関する調査」調査報告書②
新法律の中の老人施設……小野寺百合子
（SOU 1984：44）社会計画における保健政策。住環境、労働環境、失業、食事の基礎的研究……蕨岡小太郎
体外受精規制法答申出る……菱木昭八朗
No. 6　スウェーデンの経験より何を学ぶか…龍円恵喜二
「スウェーデンにおける医療保障制度の将来ビジョンに関する調査」調査報告書(3)
スウェーデンの基礎医学教育……福本　一朗
No. 7．8　北欧諸国の政治家たち……岡野加穂留
（Göteborg 通信）福祉医療の現実…三瓶　恵子
No. 9　1982年ソーシャルサービス法……一番ケ瀬康子
転機に立つスウェーデンの社会（講演要旨）
スウェーデン国会議員　ベール・ウンケル
（Göteborg 通信）
イョーテボリィと「揚げ豆腐」……三瓶　恵子
No.10　（高令社会調査視察団報告）
着実に前進する高令者対策……三浦　文夫
58年スウェーデン議会選挙……岡沢　憲芙
ウプサラ大学名誉教授故オーケ・マルムシュトリューム教授の死亡を悼んで……菱木昭八朗
No.11　（高令社会調査視察団報告）
おむつと誇り……大熊由起子
退職準備教育の動向……室　俊司
高令者の自立への構え……金平　輝子
退職前準備教育……梅田　兼光
No.12　学術交流とスウェーデン王国の持つ意味と位置……島袋　嘉昌
冬の暮し……藤井ユリ子
ダールレーフ教授と日本の教育改革
日本型福祉の問題点（視察団報告）…飯田　良明
（Göteborg 通信）矢野さんの死……三瓶　恵子
昭和60年度研究月報目次一覧

後　記

最近ある県の小学校でスウェーデンの性教育教科書（事実記述書）を翻訳、生徒に配付したことが父母の抗議により表面化し、教委から注意をうけるという事件があった。

社会・文化の相違から当然のことであり、こうした過ちを再び起したくないものである。（H. N.）

よいお年をお迎えください

昭和44年12月23日第三種郵便物認可　スウェーデン社会研究月報　昭和60年12月25日発行　第17巻第12号
毎月1回25日発行　編集責任者　中嶋　博　発行所　社団法人スウェーデン社会研究所　定価二〇〇円